



びびっと! ✨

前号から引き続き、「発達の道すじ」に目を向けていきたいと思います。“定型発達”という言葉を目にすることがあると思います。これは発達障害と対比して用いられる言葉で、年齢相応の身体的・知的・社会的な発達が平均的な範囲で順調に進むことを意味します。あくまで平均的な範囲ですので、個人差があることは当然ながらあります。国語が得意だが、算数・数学が苦手、あるいはその反対の人がいる、ということと同じように、個々の発達にも差が生じることがあります。日々の学習や保育の中で、どこかに難しさを感じている子は、その発達の差が大きいことによって難しさが生じていることがあります。

「定型発達のとおりにうちの(クラスの)子が育っていない。この子、あるいは自分(親または教師)の努力不足じゃないのか」と思うのではなく、その発達の差やつまづきに目を向けてみましょう。日々の指導や接し方の難しさに対して、解決の糸口が見つかるかもしれません。



今号では、4歳手前から4歳になった子供がどのように内面を発達させていくのかについて触れていきます。「できるーできない」にこだわっている子供は近くにいませんか?そんな子供たちについて特に大切な情報があるかもしれません。

4歳になりゆく子供たち

① 3歳児の悩み

前号では2～3歳の子供たちが“対比的意識”を身に付け始めるという話をしました。これを基に4歳を前にすると、自分に対して「できるーできない」という**二分的評価**が現れるようになります。3歳から4歳になろうとしている子供たちはよく、“がんばりたいけどがんばれない”という悩みを抱えています。「おにいちゃん(おねえちゃん)になりたい」と願う一方で、自信がもちきれず「自分でできるのだろうか」という葛藤を抱えています。「できるーできない」の**二分的評価**しかまだ自分に向けきれないため、私たちが良かれと思って「がんばって」「ほら、やってみて」と促しても、自分の番の手前で褒められている友達を見て「あんなに上手にできるだろうか。」と思ったら最後、自分の番になると「できなーい。」と固まってしまうことも少なくないでしょう。

例えば、王様役になって舞台に上がる遊びがあったとします。王様の順番が自分に近付いてくるにつれて、不安になってしまう子供もいるでしょう。不安になっている子供からすると、前の友達が“王様役”を上手にこなしている様子と自分を対比して不安になっているのですから、“王様役”をこなさせ



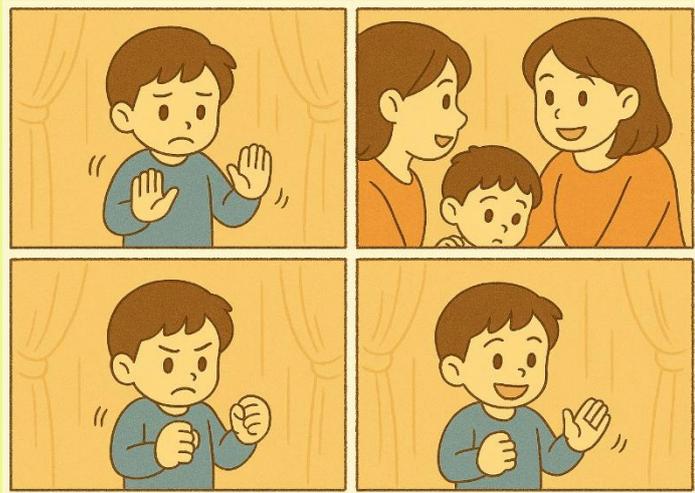
るための言葉掛けは逆効果になってしまうことがあります。そこで視点を変えて、その子供を“家来役”など違う役にすることで、子供に上手な子供との対比を促すことなく“舞台上上がることができる”という目的を達成させることができます。目的を達成させるために、手段や方法を積極的に変えてみると良いと思います。

ふたつの制御を結びつける

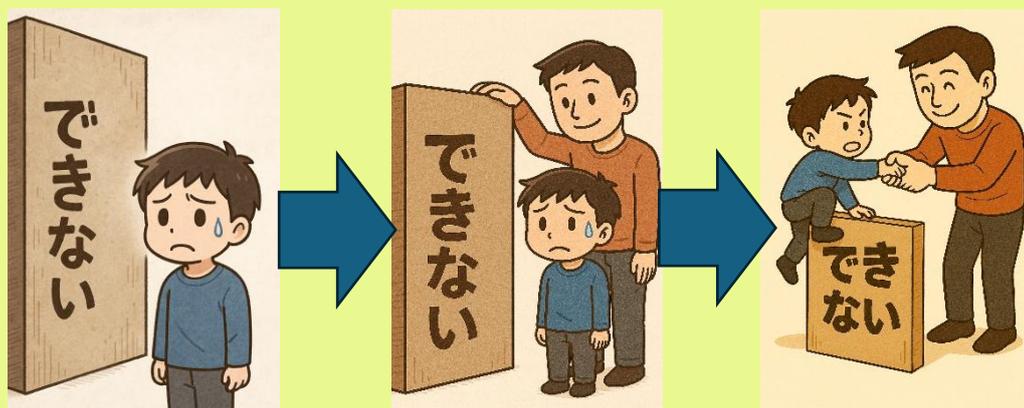
2歳では、左右の手の同時開閉、3歳では「もつれ」が見られながらも少しずつ交互に開閉する制御が可能になってきます。そして、4歳になるとほぼ確実に左右に交互開閉ができるようになります。このように、4歳はふたつの制御をひとつにまとめ上げる操作の習得に特徴があります。

手の活動では、はさみを使うことが上手になってきます。はさみを持った手を制御しつつ、紙を持った手も保持するだけでなく、方向の制御ができるようになります。生活の中では、ミカンの皮むきも上手になることでしょう。

2～3歳のころの「できるかーできないか」の“二分的評価”による



悩みも、以上のような新しい巧みさを獲得することによって乗り越えていくことができます。近くに、何かに取り組みせようとする途端に自信をなくしてしまう子供がいたら、もしかしたら、何かしらの“巧みさ”を未習得のまま今を迎えている可能性を疑ってみると良いかもしれません。不得手なことを補えるほど、得手なことがあると良いでしょうが、不得手が多い子供にとっては、それらが踏み出そうとしている一歩を尻込みさせてしまうことも少なくないでしょう。不得手が増えてしまった子供にとっては、私たちが想像する以上に「できない」の壁が高く感じてしまっていることでしょうかから、“あと少し頑張ればできそう(発達の最近接領域)”をぜひ見つけてあげましょう。それが「できた!」に変われば、「自分は頑張ればできる!」という自己肯定感につながり、重い一歩もどんと軽くなるに違いありません。



先に挙げたはさみのときの両手の動きや、ミカンの皮を剥く、ケンケンで進む、などの2つの制御を必要とする動きは、獲得しようとしている子供にとっては高い壁であることには違いありません。私たちはその高い壁を遠の昔に越えてしまっているため、その壁を越える苦しさを共感しにくくなっています。私たちが想像する以上に難しいことを、私たちは当たり前のように日々行っているのです。その視

点をもって、何かにつまずいている子供たちへの接し方、言葉のかけ方を考えてみると良いと思います。

～次号は「尊重されたい心」「筋道を作ろうとする4歳児」をお送りします。～

《引用・参考文献》

○『発達扉 上 子どもの発達道すじ』白石正久 かもがわ出版 (1994/8/10)